　ウィンドフルート艦橋。
「結局、洪水は発生せずか。面白くない事だ。」
　イハビーラの言葉。
「洪水が起きて欲しかったような言葉ですね。」
　シーネルの言葉にイハビーラは頷いた。
「当然だ。大きな被害がでて、その後始末で混乱したときに――とどめの一撃を落す。その腹積もりだったんだがな。」
　寧々発信の最終報告をその言葉とともにファイルボックスに投げ入れる。
「ち。せっかくラガウリという何度でも使える切り札を手に入れたのだ。あの力を使えば日本連合を大混乱に…」
「…混乱させてどうするのよ？」
　シーネルの言葉にイハビーラは苦笑した。
「…さて、どうしたものかな。」
「それに悪魔のほうはどうだったのよ。」
「ん、悪魔のほうは…まあ、この程度だろうな。」
「…あまり使えないことがわかったということね。すくなくとも４００以上放っても３時間ちょっとで殆どが消えたという話じゃない。」
　シーネルの意見に首を横に振るイハビーラ。
「もともと、低級な悪魔しか放っていない上に時間制限付きだ。見た目はあまり効果がないように見えても仕方あるまい。だが、日本はともかくアメリカには有効なことはすでに立証済みだ。それにくわえて南米の覇者、ムーも戦術レベルではあっさり倒せる事もな。」
　ムーのＲＯＥは基本的に人間を相手にしたものになっている。獣型の悪魔を放ち、それで襲わせればあっというまに先制攻撃をしかけられることが判明している。
　それにくわえ、非実体の悪魔に対しては全く手出しが出来ないことが判明。旧イギリス領フォークランドを幽霊戦力でもってムーを打倒。南米侵攻の橋頭堡を手に入れるというシミュレーションも立てていた。
　だが、イハビーラはフォークランド諸島の先への進撃は無理だろうと判断している。フォークランドは南米から離れた離島である以上、交戦域は限定される。が、南米にもなると戦場域はぐっと拡大。優秀な航空戦力を持たないウィミィ軍では後方にもムーの侵入を許す事になる。…まあ、そのためのＢＥＴＡの対空システムをどうにか流用使用してみようと対空攻撃のルーチンを組んでいるイハビーラなのだが。
「…どのみち軍事力が足りんな。せめて核兵器かN2 爆弾、それに類推するものが手元にないと結果的に痛い目をみることになるな。」
「…はい？」
　いきなりの言葉に首をかしげるシーネル。と、ここでフォンがなる。
「…はい。はい。」

　そのフォンにでたシーネルがイハビーラに声をかける。
「ウィミィ議会より現状の口頭陳述の要請が入りました。」
「…ち。煩わしいことだな。」
　イハビーラは舌打ちすると艦長席から立ち上がった。
「すぐ行くと伝えろ。」

SSFW Outside Story

新世紀アリス伝／Face Earth

Ep02.　季節はずれの恐ろしさ

エンドタイトル

　さて、今回の事件によって霊子甲冑の開発において、下記のような事項が追加された。
１：水(タンク及びパイプライン)周りの対氷結系攻撃への対処。
　今回の事件において、蒸気機関の動力源の一つである水が凍結し霊子甲冑が動作しなくなったことから今後のことを考慮してこの対処が決定された。一部の開発陣から「ここまでの氷結攻撃は二度とはありえない」という意見が出されたが液体窒素や酸素といった超低温液体による攻撃の可能性から仕様の追加が決まったのである。
２：同様に蒸気機関のもう一方のメインとなる熱発生機関周りの熱防護の向上。
　つまりは逆の攻撃を受けたときの対処も高めておこう、言うものである。
　シルスウス鋼は元々熱に強いという性質があるが、あくまで大(太)正時代のレベルでの話であり、現在の熱兵器…とくに成型炸薬関係に対してはあまり意味が無いことが示唆されているため、このことも採用されることになった。

　基本は以上２点だが、これによって新型の配備が遅れることがないように、という指示もだされることになった。
　この結果、新型光武が正式化後の発展形として開発が推し進められる事になる。
「やれやれだぜ。まあ、致命的な欠陥が致命的な事態になる前に判明してよかったとみるべきだな。」

とは、米田中将の意見である。
この仕様の追加について紅蘭が妙案を提案したのだが、それは幾分先の話である。

で、この帝国華撃団。
新たな新メンバーの獲得はならなかったものの、ステイトとのパイプにより新たな対魔師グループと接点をもつことにいたる。
キリスト教会系列の対魔機関（つまりはエクソシスト）と密接な関係をとれるようにしたのである。
その結果、対魔機関と警察の間の関係の再構築を進めるきっかけとなり、地方での対魔において警察などに対処法のノウハウがある程度、導入される事になった。
とくに悪魔が関わっているのかどうかの鑑別方法や、悪魔学に関する知識が大きく買われる事になる。
そういう意味ではＧＳ世界のほうが多そうな感じであるが、世界変われば品変わる…つまりは悪魔に対しての対処法というのはその悪魔の出身の世界の方法を用いたほうが大抵の場合において非常に有効、ということもあり「新たなノウハウ」は神秘学の発展に大きな寄与をするのである。
というか、この対魔機関との提携により一番狂喜乱舞したのはなんといっても鷲羽ちゃんであった。サミー達につづく確実に居場所がわかり、協力を願える魔法使いがいたことだろう。

…余談だが、法術を始めとする対魔法術の教えなどもあったがやはり「素質」が必要な事から応急的に導入するレベルにしかならなかった。

さて、長らく出番の無かった本来のメンバーに視点を戻してみよう。

事務所の中。
ぱすちゃメンバーによる、夜が来るメンバーへの授業は毎日のように続けられていた。
その結果…

亮と幽霊が相対している。間合いは広く、相手にはまだ剣が届かないであろう、その位置。だが幽霊の力により、宙に浮かんだフォークが亮の身体に僅かながら傷を与える。
亮は相手の行動を予見、その産まれるであろう間隙を見抜いて修練の賜物を繰り出しにかかる。
「走狐襲！」

亮は一歩踏み込みんで勢いをつけると、次の一歩でその間合いはいっきに詰めきる。
「鋭っ！」
亮が手にした剣は幽霊の身体を捉える。
「オォォォォォーーーーーン」
まるで犬の遠吠えのような咆哮が響いたあと、幽霊の姿は掻き消えてしまった。
「へえ…」
鏡花は亮のその攻撃をみて感嘆の声をもらす。
「へへ。俺にもついに奥義が出来たな。」
いままでは不利だった間合いを解消できる技の習得は彼に更なる自信をつけさせたようである。
「でも、もうすこし傷を作らないようにしなさいよ。」
鏡花は亮の体のかすり傷ながら、血の滲む部分に手をかざす。
「はい。終わり、と。」
しばしの時間かざした後、その部位の血を拭うと傷は無くなっていた。
「…はあ、鏡花にこんな技が増えるとは夢にも思わなかったな。」
亮の感想に苦笑する鏡花。
「これ、いづみのと違って自分の傷だって治せるってのが大きいわよね。」
「へえ。」
「これで、手傷の治療費が浮くわ。」
「…まあ、ミューゼルさんが来てからは治療費がものすごく浮くようになったよな。」
支出の４割を占めていた治療費(薬価代込み)がいきなり０になったのだからＧＳ稼業の収支は非常に良くなった。
「やっぱ、治癒魔法って偉大…って、こうやってみると実感するわ。」
鏡花はそういいつつ、亮の手傷を癒していく。
「はい、終わり。依頼主に悪霊退治の報告をしにいきましょ。」
「おう。」

黒い霧。
そして美しい妖精。
「…フォークランドは延期か。まあ、議会に切れ者が居て助かったよ。」
「フォークランドがなんなのかわからんが…我の新たな身体はまだなのか？」
「ああ、それだが…君に提供するものはこれにしたよ。」
「…なんだ、これは。弱々しいな。」
ラガウリはイハビーラの渡した写真を見ての感想を述べる。
「ふむ。それは確かに弱い。だが――君の力を用いれば、暗黒神降臨といってもいい恐怖

を演出できる。」
「ほう…。つまり、外見は弱いが実体は非常に強力ということかね？」
「いや。実能力も低い。…ただ、ある特殊能力をもっていてね。」
　ラガウリは低い、とイハビーラが言った時に顔を曇らせたが、そのあとの特殊能力、のところで興味をもつ。
「それは一体なんだ？」
「それはその身体ができてからのお楽しみだよ。…さて、どの技術を継承すべきかな…。」
　イハビーラは楽しそうに今現在、手持ちにある悪魔を眺めていった。

　天候災害は終わった。
　だが、悪夢のような人災――というか神災――は続く。